

ミディアムの夢

マックあつこ

また、あれが始まってしまったのだろうか……。

目覚めるや、心に不安が突き上げた。夢から逃れようとして無理やり目を覚ましたせいで、頭が重く身体もだるい。

夢のなかで、喉が渴いて堪らなかつた。気がついていたら、がぶがぶと水を飲んでた。でも、なぜか皿から直接。

喉が潤うと今度は猛烈にお腹が空いた。と、缶詰が目の前に現れた。ツナでも好物のメキシカンビーンでもなく、犬の写真のラベルがついた缶詰。それを誰かに開けてもらいたくて、私は夢中で尻尾を振っていたのだった。

もしまたあれが始まってしまったのだとしたら、暫くは眠れなくなってしまうだろう。明後日は試験なのに……。

自分の奇妙な夢に気づくようになったのは、海外留学しようとか社を辞め、オーストラリアに移ってからだった。とても自分とは思えない、けど何か一貫性のある夢を見るようになったのだ。自分ではない、誰かの夢。それを一度ではなく暫く見続けるせいで混乱し、睡眠障害を起こしてしまう。それがどういふことなのか、私にはわからない。

海外生活や勉強のストレスが原因なのだろうか？

次の夜もまた夢を見た。芝生にテニスボールが見えた。それをつかもうとする自分の手はつきりと見えた。ふわふわした黄金色の毛。私はボールを投げてもらいたくて、芝生のうえを飛び回っている。

と、男の子が見えた。七歳か八歳くらいの子だ。胸に校章の入った水色の半袖ポロシャツと紺の半ズボンを着ている。陽光に金髪が輝いて、そばかすの散った笑顔を私はいとしいと感じていた。なんとか少年の気を引こうと吠えたり、尻尾を振って追いかけている。

目覚めるや混乱した。間違いない、今夜もまた夢の中で自分は犬、だったのだ。どうしてこんな夢を見るの！時計を見れば四時前だ。明日は試験だというのに二時間しか眠っていない。無理やり目をつぶり眠ろうとした。

と、まだ眠ってもいないのに、家が見えた。カリフォルニアバンガロー調の家で、前庭に見事なマグノリアの木がそびえている。その横に変わった形の噴水があった。飛び上がった魚が三匹、口から水飛沫をあげている。

「オズカー！」自分を呼ぶ少年の声がした。喉を開けるや怒りが突き上げた。

「何なの、いったい、いい加減にしてよ！明日は試験なの、私は寝たいの！お願いだから放っておいてよ！」

日本語で怒鳴っていた。それでも想いは伝わったのか、

その夜はもう何の夢も見なかつた。想い？ それをいったい自分は誰に伝えようとしたというのだろうか。ううん、誰が自分に何を伝えようとしているというのだろうか？

翌朝、つい夢のことを考えながら、いつもの通りを駅へと歩いてた。と、足元にテニスボールが転がってきた。

テニスボール？ 思わず転がってきた方角を見やれば、鮮やかなマグノリアの花が視界に飛び込んでくる。前庭には三匹の魚の噴水までもがあった。この家は？

「どなた？」という女性の声に、自分がその玄関先に突っ立っていることに気づいて、頭の中が真っ白になった。次いで自分の口から出た言葉にはもっと啞然とした。

「オズカーって犬を知りませんか？」

「オズカー！ ママ、オズカーが見つかったのッ！」

間髪をおかずに廊下の向こうから男の子が駆けてきた。ブルー系の制服、そばかすに金髪の――、夢の少年だ！

「あなたがオズカーを見つけてくれたの！」

「いえ、その……」

「オズカーはうちの犬ですけど」と母親が答えた。「です

が先週、家族でキャンプ旅行に出たときに、はぐれてしま

って。必死で捜しているんですが見つからないんです。こ

の子など夜も眠れないほど心配しています。オスのゴール

デンレトリバーです。もしかして、お心当たりが？」

「この犬だよ」と少年がポケットから写真を取り出した。

昨夜の夢と同じ毛色の犬と、今よりずっと幼い顔をした少年が写っていた。兄弟のようにびたりと寄り添う姿に、喉元を熱い塊が突き上げた。この犬がこの家に戻ることはもうないだろうに……。切なく思った瞬間、生暖かい風が吹き、もつそりと何か温かいものが傍らを通り過ぎた。

違う、もう家に帰っていたんだ、今もこの子の隣に！

「オズカーのだよ！ これ、どこで？」

少年がボールを受け取った瞬間、言葉が滑り出ていた。「私ただ、オズカーは大丈夫だって伝えたかったんです。今も元気で、そうしてあなた方のことを愛している、と」

一息に言い、くるりと背を向け駆け出した。視界の端で少年の青い瞳から涙がぼろぼろ零れ落ちるのが見えた。

その夜、また夢を見た。芝生の向こうからゴールデンレトリバーがテニスボールをくわえ駆けてくる。そのボールを受け取ると、私は青空へ高く放った。オズカーはボールを追って駆け出した。ボールの先に、目映い光があった。光の中へと飛び込んでゆく。

最期に吠えた、きらめく声が、目覚めてからも耳から離れなかつた。もう私がこの夢を見ることはないのだろうか。